

雲雀 令和8年2月度特別作品

黄金山に暮らして 雲雀

五十年近く前に、黄金山に越してきました。来た当時は、春には鶯が鳴き、近くの池では蛙が鳴き、町内放送で地域の伝達があたりしました。その後、次第に団地が広がって、様子は変わり、今では、当時のことがとても懐かしく思えます。退職して時間ができてからは、健康のためと、一時間ほど散歩することが多くなりました。細い山道では、季節の花や草木に目を惹かれ、家々の手入れされた庭木の美しさに足が止まることもしばしばです。この度の特別作品は、四季の移ろいの中の日々を思い起こす良い機会になりました。

漫ろ歩くこの坂道に犬ふぐり

でこぼこの道の先つくしんぼ

鶯の声のまにまに物を干し

桜纏ふ黄金山を見上げけり

花祭生まれし吾子はもう五十路

門前に人が足止めクレマチス

朝涼に歩いて今日も会ふ人よ

夏祭片付け終へてただ静か

朝夕に凌霄の花掃いてをり

立ち話玄関口の蚊遣かな

《作品鑑賞》

ふじ女

黄金山の、日常の中にある自然と時の移り変わりを感じさせていただき、和やかな気持ちになりました。身近に大きな愛すべき山という存在があるのは、定点観測できていいですね。住んでいるとなれば、変わるようでも変わらぬ物差しを持って暮らしている豊かさにも思えます。黄金山は、毎年桜を見にいらした時期もあり、混雑するので葉桜のドライブが多かったこと、チューリップ咲くどこかの家の花壇が綺麗だったことを思い出しました。でこぼこの道の先つくしんぼ

このこの、という言葉の並びが可愛らしいです。つくしを山のように探る人は減ったと思いますが、黄金山ではどうでしょうか。

門前に人が足止めクレマチス

この家に住む人も嬉しいでしょうね。花談議が普通にできそうな気配が感じられます。

朝涼に歩いて今日も会ふ人よ

新聞では恐ろしい事件がいろいろありますが、日常ではそうでもないことも多いことに気付かれます。毎日、同じことを楽しんでいる人がいるというのは、その誰かの存在だけで、ありがたく思えます。俳句も同じですね。